



▲ 捜索活動の状況
(提供：小豆島町) ▶



背景

昭和51年（1976）9月の台風17号による集中豪雨は、香川県全域に被害をもたらしました。中でも、小豆島町池田の四方指観測所では9月8日12時から9月13日15時までに1,400mmという1年分に匹敵する降雨量を記録しました。この豪雨により、随所で土砂災害が起こり、小豆島町池田の谷尻地区で24名の死者を出すなど、県内各地で合わせて死者50名にのぼる大災害となりました。

アクセス

災害現場付近（砂防ダム(蒲野地区)）

- 小豆島町役場池田庁舎より南南東へ直線距離約5 km
- 小豆島町蒲野地区
- 緯度経度 北緯34度26分25秒，東経134度15分01秒



昭和五十一年（一九七六）の台風一七号の時、地区総代として土砂災害を経験した人の証言です。たたきつけるような豪雨の中で、「土石流が起こった。家がつぶされ、多くの人たちが生き埋めになっているかもしれない」との第一報が入ったのに続いて、土石流災害発生のお知らせが次々に入ってきます。小豆島の全ての沢という沢で土石流が発生してしまったのではという感じさえ受けるほどです。想像も付かない、とんでもない規模の土砂災害が発生したということだけは分かりました。しかし、各種の情報が入り乱れる中、どれだけの人達が犠牲になっているのか正確な人数さえ分かりません。とにかく行方不明者の捜索を急がなければいけません。そこで、陸海自衛隊、県警機動隊、消防団員、その他、地元自治会など各方面に緊急の協力依頼をしました。

行方不明者の捜索は困難を極めました。土石流で流れ出した大量の土砂はドロドロの状態で堆積（たいせき）しています。そのため膝（ひざ）までぬかるんで、歩くのがやつとの状況です。それでも一刻も早く全員が発見されることを一心に願いながら一生懸命に捜索に取り組みました。そして、「おうい、最後の一人が見つかったぞ」という声が響いたときには、「疲労困憊（こんぱい）の中で皆が心から手を合わせました。「見つけて本当に良かった、この感慨は一生忘れることができない」と誰とはなしに口をついて出ていました。

小豆島は瀬戸内海に浮かぶ風光明媚（めいび）な島で、壺井栄の小説「二十四の瞳」の舞台となったところとしても有名です。典型的な瀬戸内海気候で豪雨災害の発生など考えられない小豆島で、これだけの規模の土砂災害が起こったことは、三〇年経った今でも信じられないことです。